



村川 淳 著
『浮島に生きる
—アンデス先住民の移動と「近代」』

京都大学学術出版会 2020年 408+ xvii ページ

ISBN 978-4-8140-0267-2

南米・アンデス高地のティティカカ湖は、ペルーを訪れる観光客にとって、マチュピチュの遺跡やナスカの地上絵と並ぶ見所のひとつである。湖畔の街プノの棧橋から観光船に乗って30～40分進むと、湖に自生するトトラと呼ばれるアシに似た植物を積み重ねてできた浮島がいくつも連なる場所に着く。壁も屋根もトトラでできた家が並ぶ浮島の広場では、色鮮やかな服装の女性たちが、湖での暮らしを描いた刺繍や、トトラで作った模型船などの民芸品を売っている。浮島の住民の生活は、観光客の目にはのどかに映る。しかし本書を読むと、湖の内外での政治・経済・社会の変化に対応して、彼らの生活がダイナミックに変わっていることがわかる。

本書の著者は、2004年から2013年にかけて、のべ26カ月にわたり、浮島の住民と寝食をともにしながら、彼らの暮らしや移動について調査を行った。加えて、プノ、クスコ、リマなどの各都市で、文書資料の収集や関係者からの聞き取り調査を実施した。これらによって得た膨大なデータを駆使して、浮島の住民の暮らしが、これまでにどのように変化してきたのかを考察している。

本書の内容は、大きくふたつに分けられる。5章までの前半は、アンデス高地や浮島に住む人々に対する研究者や中央政府など外部からの働きかけと、それに対応する人々の歴史である。湖畔の湿地帯の利用をめぐる湖岸の先住民や大土地所有者との対立、1970年代に設立された「ティティカカ国立保護区」における資源利用や保護区入場料の徴収権をめぐる駆け引き、中央政府による1990年代の土地権利の明確化に対する抗議活動などを取り上げて、浮島の住民がどのように生活を守ってきたのかを検証している。

6章以降の後半は、都市への移住のほか、観光業や狩猟・漁労などの経済活動に焦点をあて、今日の暮らしを描写している。なかでも浮島の住民の生活を大きく変えたのが観光業である。観光客が落とすカネを求めて浮島が増え、それぞれの島が観光客を引きつける工夫をこらして競争している。マイクロクレジットを利用して、船外機購入やレストラン建設に投資をする住民も現れた。一方で浮島の住民は、観光船が立ち寄る島のローテーションを組んで協力するほか、遊覧用の大型トトラ船の建造や土産物の刺繍の製造など、湖の内外で分業を進めている。丁寧な資料収集と精力的な現地調査で裏付けながら、浮島の住民の暮らしを生き生きと描いた力作である。

清水達也（しみず・たつや／アジア経済研究所）